

教 仏 名 聞

第30号
(発行日)

2013年3月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日午後6時30分始。

* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

お念仏に導かれて ①

(一〇一二年七月。名古屋別院主催の「人生講座」でのお話を三回に分けて掲載いたします)

*

みなさんこんばんは。私は大阪教区西宮市の甲子園球場の近く、近くといいますが歩いて三十分ほどかかるところに小さな念仏の庵と申しますか、民家を改造しまして、ささやかな念仏の道場を開き、その住職をしております。

実は、私が小さな寺を開いたという事は、お寺の生まれではない者でございます。岡山県の津山というところで、幼い頃小学・中学・高校と過ごしてまいりました。家は、割烹旅館を親がしております。全く真宗に関係ないような、家にもちろんお仏壇もお内仏もございません。祖父母も仏教には縁がない。まあ、何か縁があるとすれば、天台宗のお寺にお墓がありまして、年に何回か祖母がお墓参りに行く。それについていく程度で、そんな時もお堂の中に入って手を合わすとかいうことはなかったわけです。私の親

なり祖母、祖父はもう早く亡くなりましてけれども、仏様に手を合わす姿も見たことがなかったわけです。

ですから、小学・中学とですね、その時代は聞こえてくる音といえ、芸者ワルツやお富さんとか流行っていた歌謡曲、そういうのを歌いながらお酒を飲んでいたりという人たちが周りにいましたね。そして、女の人のちばかりでした私の周りには：仲間さんが多いときには五人ほどいました。

そんな中で、全く宗教にも仏教にも関係ないところで生活をしていましたので、皆様方の名古屋や三河といいますが、こちらの方は真宗の地盤ということ、小さい時から「南無阿彌陀仏」の声を聞かれたり、正信偈の声を聞かれたり、そういう中で生活をされた方が多いと思います。

私はそういうことでお念仏の声も正信偈の声も聞いたことがなくて育ってきたのですけれども、しかし今から考えますと小学校時代から人生の悲哀とい

ますか、運動会なんかがある、運動会で「わあー！」と騒いで祭りが終わ

り、にぎやかなことが終わるとなんともいえないさみしい感じがしました。なにか、人生というものはそういうものではないかと。生まれ、死んでいくという悲哀を小学校五、六年の時から感じておりました。

それから、中学校に入りました。中学の二年生(十四才)の時に自分の心が問題となってきました。ふっと、自分の煩惱です。その頃は、勉強にかなり力をいれていたものだから、成績がグーッと上がりましてね、

親も喜ぶ、先生からは褒められるということがあったのですけれども、自分よりよくできる人が当然いるわけです。どれだけ私がかんばっても、何人もいる

わけです。そういう人がいるという事が、うとうとうしいというか、自分より優れた人を見るというのが嫌なのです。それまでは、問題なかったのでしょうか。けれども、その妬み心ですね。優れた人を妬むような気持ち、実に嫌だなあと：この心をなんとかしたい：こんな心が、一生続くじゃないかと。将来会社に勤めたとしても、自分より優れた人はいくらでもいるわけで、あるいは自分より幸せな人はいくらでもいるわけでしょ。そういう人に対して妬み心、これをなんとか取らないとこれから本当の安らぎはないと。そういう事にぶつかりました。

大体十四才というのは、池田晶子という哲学者がいて、もう亡くなりましたけれども、その方が『十四才からの哲学』という本を何年前かに書いて、人気があつた本でございますけれども、

《 念佛寺永代経法要 》

四月二十二日(月) 午後二時始

講師 藤枝宏壽師 (福井県越前市)

緒に行きまして、途中タイで十日ほどおりました。そのお坊さんは、初めて外国へ行かれたんです。私は二回目でした。最初に海外に行けばだれでもちよっとはうろろあちこちを見ますよね。お店屋さんを見たらちよっとなんかおどろく。そういうことを全然しない。自分の目的地までずつと歩いていかれる。用が済んだらさつと帰る。

日本から出てタイに最初に泊まりましたその晩は、ホテルに泊まったのです。そしたらへこいう所に修行僧がおるのは贅沢だ。こういうところにははいけない」といって、日本人が戦争なんかで現地で亡くなった方がいるでしょ、そういう方の遺骨を納めている寺があり、そこに泊まることになりました。大きなお寺の境内に一つの納骨堂がありました。その御堂を訪ねまして、そこに泊めていただいたわけです。ですから、小さな御堂の中で、私とその方で泊まるわけです。そこに遺骨があるのです。しかし、そこに長くいるわけにもいかないので、その後はワットパクナムという大きなお寺に行きまして、そこでいらしてほしいといつて、むこうの修行僧と一緒に一週間ほど生活をしました。ベッドとい

つても木のベッドにゴザをひいているだけで、布団も何もありません。蚊取り線香も焚きません、殺生罪になるから。

その方がなぜそういう禅の道に入られたかというところ、その方は青山学院の英文科を卒業されて、翻訳なんかもしておられました。ところが人生の問題に悩ましまして、日本国中をうろろ放浪していたというわけです。放浪してまして、たまたま福井

県の永平寺に行って、そこのお坊さんから座禅の指導を受けて始めて座禅を組んだ。座禅を組んでみたら、すつと気持ちが悪くなったというのです。「ああ、これはいい」ということで、それから座禅一本で、出家をして専門の禅僧として、ずつと来ておられました。だから、「行」というのはそういう意義があるのだなと思います。

今日例えば、アメリカも三百万人ぐらいの仏教徒がいるといわれていきます。その中の半数をちよつと越えたぐらいが、日系の仏教徒とか韓国系の仏教徒とかあるいはタイとかベトナム系のいわばアジアの仏教に縁ある国から向こうに移民として移住された方、その子孫の仏教徒。他に百何十万人の方はいわゆる

白人、キリスト教の家庭やユダヤ教の家庭、元々アメリカにおられたというような人が仏教に入つて仏教徒とされる。

そういう方は、一番の関心というのとは何かというと、まずは「行」だそうですね。仏教の教理を深く学んで、その仏教の教理に随分感銘したということもあるかもしれないけれども、多くの人は座禅してみるとか、あるいはタイ・ミャンマー・スリランカに伝わっている上座部仏教のヴィパッサナーという行があり、あるいはチベットの仏教ではゾクチェンという行があつて、そういう行いけば実践に魅力を感じて、そこから仏教徒になつていく、それが普通だそうですね。

一九七〇年代の時代、ヒッピーといわれたヨーロッパとかアメリカとかの若者には、インドは一つの憧れの地でそういうヒッピーの若者が、お釈迦様が悟りを開かれたブツダガヤなんかに来るわけです。そして、菩提樹のまわりで座禅をしている僧の姿を見て、感銘を受けるのですね。自分も座禅を組みたいということ、私のいた日本寺に毎晩二十人ぐらい、座禅を組みに、次から次と白人が来ていました。そういうことで、新し

く仏教というものに触れていくには、やっぱり「行」というものが一つの入口になるといいますが、これは当然ありうるわけですね。私の場合も、念仏という行にひかれました。

近年、真宗の教団でもあまり念仏の行、称えるということが少なくなつてきています。ただ、教理・教学というものだけでは、真宗に惹きつけるものが乏しいのではないかと、個人的には感じることで。

それで、親鸞聖人の当時のお話ですけれども、法然聖人は一三三年にお生まれになって、そして十五歳の時に比叡山に登られて、天台宗の修行僧となられる。そして三十歳ぐらいにはお念仏を親しく申すようにはなられていたそうです。

ところが、念仏は申しますけれどもその当時の比叡山の念仏というのは、これは修行としての念佛で、いわゆる極楽浄土に生まれる修行の一つなのです。大事な行の一つなのです。けれども、念仏だけではなくて止観の行・内観する行とか、あるいは経典を誦読するとか、あるいは回峰行というようなものもあつたかもしれません。色々な行の中の一つの行として、称名

念仏を称える。法然聖人はそのような行の中で称名念仏を重要な行としてなされていたわけです。けれども、念仏は称えられなくても、決定ができないのです。これで浄土に生まれることができないという決定がつかなくて、随分悩まれたようでございます。

ところが四十歳を過ぎられまして、善導大師様の書物を何度も読まれて、その中で阿弥陀仏の本願の思召しを善導大師の書かれたものから感得された。それは、阿弥陀様は私たちに「我が名を称えるばかりで、浄土に生まれさせる」と、こういう念仏往生の誓いを建てられて、その誓いを成就して南無阿弥陀仏を与えて下さる。「我が名を称えるばかりで、必ず浄土に生まれさせる」と誓つて下さっている」。これに非常に感銘をされました。

「私は今南無阿弥陀仏と称えている。称えているということは、これは阿弥陀様が我が名を称えるばかりで、浄土に生まれさせると誓つて下さっている、その誓いの力によつて、この本願の力によつて、私は浄土に生まれることができる。ああ有難い」と、そこに本願を信じ念仏申す身となられたのが、法然聖人でございます。(続く)

正信偈に学ぶお問答

(五十一)

矜哀定散与逆悪 光明名号顕因縁

(書き下し) 定散と逆悪を矜哀して、光明名号、因縁を顕す。

(現代語訳) 善導大師は善悪のすべての人を哀れんで、光明と名号が縁となり因となってお救い下さると示された。

N 「次の〈光明名号、因縁を顕す〉を説明して下さい」

D 「ここでは、善導大師は、阿弥陀仏の光明と南無阿弥陀仏の名号の用き(因縁)によって一切衆生が救われて浄土に生まれるのだと、お示し下さったと聖人は讃えられているのです」

N 「この場合の因縁とは」

D 「名号を因とし、光明を縁とされます。その因縁によって衆生に本願を信じる信心が成就して救われるといわれています」

N 「光明が縁であるとは」

D 「阿弥陀仏の光明の用きは私たちに働きかけ、それによって私たちは仏法を聞くようになるのです」

N 「たとえばどんな働きですか」

D 「親とか友人から仏法を聞くこと

を勧められたり、あるいは仏教書を読んでもつたり、あるいは親族の死や身近な

災難などを縁として人生の無常を感じて仏法を求めようになったり、そういうさまざまな縁の働きによって私たちは仏法を聞くようになるのですね」

N 「さまざまな仏法への縁は光明の用きといえるのですね」

D 「ええそうです。さらに、善き仏法の先生にご縁ができて、親しく仏法を聞くようになるのも、阿弥陀仏の光明の用きなのです」

N 「そういう光明の用きがあつて仏法を聞くようになり、それによって次第に教えが分かってくるのですね」

D 「ええそうです。私への光明の用きがなければ私たちは仏法を聞くこともなかつたのです。ちょうど太陽のあたたかい光を蒙ることによって土中の種から芽が出て茎が生え、葉が出て花が咲くように」

N 「光明によってお育ていただくのですね」

D 「そして、釈尊がこの世にお出ましになつて教法を説かれたのも、その教法を受け継ぎ伝えて下さつた祖師方も、阿弥陀仏の光明の用きを歴史の上に表すべく現れて下さつたといえます。もともと光明の用きがな

ければそういう方々も出現しなかつたのですから、光明の用きが根源であるといえます」

N 「阿弥陀仏の光明の用きに反応し、光明の用きを映し出すべくこの世界に出現されたのが釈尊を初めとする祖師方、私どもで言えば七高僧や宗祖や蓮如上人、それに身近な善知識なのです」

D 「ええそうです。そういう諸仏・善知識のご教化のお育てによって私たちが教育(仏教教育)されてきたのです」

N 「善知識の説法を聞かせていただくのも光明のお用きなのです」

D 「ええ、そして仏の光明の用きの中核が教法の言葉なのです。經典の言葉や聖人の教えの言葉は光明がまさに言語化されたものです。ですから教法を聞くことは直接に光明の用きを受けていることになります」

N 「源氏物語に
みことばをひかりとして
という一節があるようですが、仏のお言葉を光として仰いでいるということですね」

D 「ええ、仏の光明を仰ぐというのは、具体的には教法の言葉をお聞かせいただいていることなのです」

N 「教えを聞くこととは光明に直接ふれていることなのですね」

D 「そして、阿弥陀仏はその光明によって私たちに教法を聞かせて下さるとともに、名号を与えて下さるの

です」

N 「名号を与えて下さるとは」

D 「南無阿弥陀仏の名号を称えよとお勧め下さり、それによって称える身となり、称名において(ナムアミダブツ)と聞かせて下さっていることとです」

N 「お念仏を称え聞いていることは名号を与えられていることなのですね」

D 「ええそうです。そして教えを聞くということは、この南無阿弥陀仏のいわれをお聞かせいただくことなのです」

N 「教えを聞くと南無阿弥陀仏のいわれを聞くことなのですね」

D 「ええ、ですから、もし南無阿弥陀仏を称えていなければ、南無阿弥陀仏のいわれを説いて下さつても、肝腎の物柄がありませんので、聞いた教法が宙に浮いてしまいます。いわば教法は単なるお話となり、観念になつてしまつて現実性が乏しくなります」

N 「与えられた名号を称え、その名号のいわれを聞く、それが救いの因縁になつて下さるのです」

D 「ええそうです。お念仏(名号)を称え聞くことと、お念仏のいわれ(光明)を聞法すること、この二つでもつて、衆生を救済しようとして下さる、そのことを善導大師が明らかにして下さつたことを(光明名号、因縁を顕す)と仰せられるのです」